

ステークホルダーのみなさんに お願いしたいこと

研究代表者 佐藤 哲

- **それぞれのフィールドにおける研究開発**
ご自身のフィールドで、研究者とともに研究課題の設定、研究の推進、研究成果の共有と発信にご協力ください
- **地域環境ネットワークの設立と運営**
ネットワークの中心メンバーとして、ネットワークの設計、設立、運営にご協力ください
- **協働のガイドラインと研究評価システムの構築**
ステークホルダーの視点から、協働のガイドラインの策定と改善にご協力ください
問題解決型研究の評価者として、研究評価システムの構築にご協力ください

科学者コミュニティの変容

地域環境学ネットワーク

- ・協働のガイドライン
- ・問題解決型研究の評価システム
- ・ネットワークの拡大・深化

協働のガイドラインと評価システム構築への参加

研究開発に協力するステークホルダー

環境団体、地域づくり団体
自然資源利用者、
一次産業、観光事業者
地域博物館、行政機関

澤田俊明 ([有]環境とまちづくり(徳島県・代表))

勝瀬真理子 (徳島県立千年の森ふれあい館・館長)

上田 篤 (豊岡市コウノトリ共生課・課長・兵庫県)

金尾滋史 (多賀町立博物館・多賀の自然と文化の館・学芸員・滋賀県)

山城常和 (白保魚湧く海保全協議会・代表・沖縄県)

垣花薫 (慶良間海域保全連合、代表・沖縄県)

比嘉義視 (恩納村漁協・指導員・沖縄県)

半田ゆかり (奄美哺乳類研究会・鹿児島県)

与儀 正 (八重山漁協・青年部長・沖縄県)

統合実装

評価フィードバック

「地域環境学ネットワークの形成を通じた科学者コミュニティの変容」グループ (研究代表者: 佐藤哲・松田・高橋大輔・鎌田・家中・新たに雇用する研究員)

研究開発グループ

統合

フィードバック

ステークホルダーと協働した参与型研究

「レジデント型研究機関を中心とした科学者の変容の実態把握」グループ

グループリーダー: 鎌田磨人
レジデント型研究者 (池田・牧野・高橋一・白川・佐藤)

連携

「ステークホルダーと科学者の相互作用と協働の実態把握」グループ

グループリーダー: 家中茂
主に訪問型研究者 (三輪・大西・鹿熊・松田)

研究開発組織の概

レジデント型研究機関における科学者の変容に関する知見の提供
ステークホルダーと科学者の相互作用と協働に関する知見の提供

それぞれのフィールドにおける研究開発

- 各フィールドの研究開発課題の確定と研究計画の策定にご参加ください(当面の研究開発課題は6ページ以降にあります)
- 地域における環境保全・自然再生・自然資源管理などの活動を推進する中で、それぞれの研究開発課題に関してステークホルダーの視点からのインプットをお願いします
- 地域の多様なステークホルダーの研究開発課題に関する考え、批評、アドバイスなどを収集し、科学者と協働して研究開発に活用してください
- 研究開発の成果についてステークホルダーの視点から評価し、研究開発と改善を推進すると同時に、成果を地域の活動にご活用ください

地域環境学ネットワークの設立と運営

- 地域環境学ネットワークの設立発起人として、ネットワークの設計と準備にご協力ください
- ネットワークは現在のメンバーが持っている人脈を通じて拡大していきます。ご自身の人脈を活かしてネットワークの活動への賛同者を募り、ネットワークの拡大にご協力ください
- ネットワークの運営にコアメンバーとしてご協力をいただき、ステークホルダーの視点から組織運営のポリシーと手法の改善に関するアドバイスをお願いします
- ネットワークから得られる各地の取り組みに関する情報を、それぞれの地域の活動に活用してください

協働のガイドラインと研究評価システムの構築

- ご自身のフィールドにおける研究開発の成果を生かして、協働のガイドラインの設計にご参加ください
- 協働のガイドラインの内容に関して、ステークホルダーの立場からアドバイスをお願いします
- ご自身のフィールドにおける研究開発の成果を生かして、研究評価システムの構築にご参加ください
- 問題解決型研究の評価者として、ご自身のフィールドにおける研究評価を試行し、地域の活動を改善していくと同時に、研究評価システムの運用と改善にご協力ください

各フィールドにおける研究開発

●「レジデント型研究機関を中心とした科学者の変容の実態把握」

- ★徳島大学(鎌田磨人): 地方大学のレジデント型研究機関への変容の課題
- ★兵庫県立コウノトリの郷公園(池田啓): 協働の持続性を保証するしくみ
- ★滋賀県立琵琶湖博物館(牧野厚史): 博物館・動物園水族館などのレジデント型研究機関としての役割(特に市民調査などの中核として)
- ★WWFサンゴ礁保護研究センター(佐藤哲): 歓迎されにくい外部者の役割の確立
- ・芸北高原自然の館(白川勝信): レジデント型研究者のネットワークの現状と課題
- ・長野大学恵みの森再生プロジェクト(高橋一秋・佐藤哲(兼任)): ステークホルダーに活用される知識セットとは?

●「ステークホルダーと科学者の相互作用と協働の実態把握」

- ★沖縄県恩納村・座間味村(家中茂・三輪信哉): 生活戦略・経営戦略における科学的知識の活用をうながすしくみ
- ・千里リサイクルプラザなど(三輪・家中): 市民調査の意義と科学者の変容
- ★鹿児島県奄美地方(大西秀之・松田裕之(兼任)): 在来の知識と外部から流入する科学的知識や制度(世界遺産登録など)の相互作用と協働のしくみ
- ★沖縄県八重山漁協(鹿熊信一郎): 行政機関の知識生産をステークホルダーが活用するしくみ

Can you live with this?

徳島大学を事例としたレジデント型研究機関としての地方大学の役割の再検討

徳島県の森林再生および持続的資源利用に係る事業の中で、徳島大学の科学者が行政と地域住民との関係性を保ちつつ実施してきた研究が地域社会のステークホルダーとの協働を通してどのように変容したかを追跡し、大学科学者の知識生産の変容過程を明らかにする。また、今後の大学としてのレジデント型研究展開の取り組みを合わせて、ステークホルダーからのフィードバックによる大学における科学研究の変容を検証し、研究成果の問題解決に対する貢献の程度が地域社会に評価されるしくみを検討する。

兵庫県豊岡市の自然・地域再生への取り組み におけるレジデント型研究機関の役割の検討

兵庫県立コウノリの郷公園のコウノリという「環境アイコン」を通じた田園環境の再生の試みを対象に、地域社会のステークホルダーの一員であるコウノリの郷公園が、長期継続型の研究を実現し、研究内容をコウノリ野生復帰に関する生物学的研究から田園環境と地域社会全体を包含する総合研究へと変容させてきたプロセスと、変容を促した要因、および研究の継続を可能にした要因を明らかにする。コウノリの郷公園に対する行政、地域社会のステークホルダー、訪問型研究者の評価の変遷から、地域社会による研究評価の基準と特徴を解明する。

滋賀県立琵琶湖博物館におけるレジデント型博物館による地域環境へのアプローチの分析

地域に密着した博物館として設立当初からレジデント型研究の理念を掲げて多様な研究活動を展開してきた琵琶湖博物館の事例において、琵琶湖と人間との関係のありかたをめぐる問題解決型の研究の中での科学研究の変容プロセスを分析する。特に、琵琶湖博物館が多様な形で推進してきた市民調査の中核としての科学者の役割の分析から、科学者との協働のもとに行われるステークホルダー自身による知識生産の意義を明らかにする。

石垣島WWFサンゴ礁保護研究センターにおけるNGOによるレジデント型研究活動の展開

石垣島白保においてWWFサンゴ礁保護研究センターが蓄積してきたサンゴ礁環境と地域社会の自然資源利用に関する研究成果が、地域社会のステークホルダーに受容されて合意形成に活用されるための仕組みを、ステークホルダーの視点から検討する。同時に外来の自然保護団体が設立した研究機関が地域社会のステークホルダーの一員として正当性を獲得するプロセスと条件を解明する。レジデント型研究機関がステークホルダーや訪問型研究者に支持され、信頼されて、地域社会の重要な意思決定に貢献できるようになるための要件を明らかにする。

ステークホルダーの生活戦略をめぐる科学者、 行政、地域産業の相互作用

沖縄県恩納村における資源管理型地域営漁計画に基づいた漁協経営、沖縄県座間味村におけるダイビング産業などの事例をとりあげ、科学的知識の行政過程上の利用が果たした役割や、資源管理的経営を推進した漁協指導員の漁業者集団の合意形成における役割、レジデント型研究機関としての役割を担う阿嘉臨海研究所の研究者が生産した知識が地域住民に受容されていくプロセス、地域住民が科学者コミュニティや行政過程に対して与えたインパクトを明らかにし、ステークホルダーの生活戦略（経営戦略）上の知識運用における科学的知識の位置について分析する。

在地の知識技術と外来の知識・制度の相互作用を通じたステークホルダーと科学者の協働

鹿児島県奄美地方における環境保護活動を事例として、現地の生活に根ざした在地の知識・技術が果たしている役割を評価し、在地の知識・技術が科学的な言説に対して及ぼす影響を検討する。世界遺産登録への取り組みやマングース対策など外来の知識や制度の受容と活用におけるステークホルダーの多様な利害交渉に着目し、ロジックとして活用した知識の相互作用や変容と、奄美野生生物保護センターなどの潜在的なレジデント型研究機関の役割の分析を行う。在地の知識技術の記録・再生・活用に関する広範な事例を文献などから収集し、在地の知識技術をめぐる科学者とステークホルダーの相互作用と問題解決へのインパクトを分析する。

水産資源管理をめぐる行政機関による知識生産とステークホルダーとの相互作用の実態把握

地域環境問題の現場において、地方自治体などの行政機関は科学的知識の第一義的ユーザーとして、政策において科学を活用してきた。しかし、各地の水産試験場や普及員の活動に見られるように、行政自体もステークホルダーが活用できる知識の生産主体としての機能を果たしている。沖縄県八重山地方の事例から、行政内部の研究者による知識生産の特徴と、ステークホルダーの研究参加と知識の活用を通じた相互作用の実態を明らかにする。これによって、行政による意思決定のプロセスにステークホルダーと科学者が関与することの意義を明らかにする。